

【地縛霊のおっさん】

結婚するぞ！ という強い意気込みのもと、一軒家を購入した。

ひとりでは広すぎるけれど、これから家族が増えるのだから問題はない。まだお嫁さん候補すら見つかっていないけれど、なんの問題もないのだ。

ということで意気揚々と引っ越してみたら、なぜかおっさんが住んでいた。

「あ、すみません。私、地縛霊なんです」と、でっぷりとした腹を抱えたおっさんは言った。

「地縛霊？」

「ええ。この家の地縛霊」

俺はがっくりとうなだれた。

おかしいと思ったんだ。新しいのに、いくらなんでも安すぎた。とんだ事故物件だったというわけだ。あの不動産屋め。

「あの、出て行ってもらうことってできませんかね？」

「そんな！ ここは私の家なんですよ!？」

「いや、今は俺の家なんです」

「そうでした」おっさんは少し照れくさそうに笑った。「でもすみません、地縛霊なので動けないんです」

「……マジで」

これから素敵なお嫁さんを見付けてしあわせな家庭を築こうというのに、なぜこんなおっさんと暮らさなければならないのか。

「大丈夫ですよ。こう見えて家事は得意ですから」

なにが大丈夫なのかわからないが、こうして俺たちの共同生活は始まった。

得意げに言っただけあって、おっさんの家事は神がかった。

念力でお皿を浮かしたり、食材を切ったり、お風呂を一瞬で沸かすことだってできた。ドラえもんみたいで俺はワクワクした。

「でも、そんな変な力で沸かしたお風呂に浸かって大丈夫かな？」

「なあに。大丈夫じゃなかったら死ぬだけですよ」

ワハハ！ とおっさんは笑った。いや、それが問題なんだけど。

まあせっかく沸かしてくれたんだし、と恐る恐る浸かってみると、ほげ〜と魂が抜けそうになってしまった。なんでこんなに気持ちがいいのだ、やっぱりこれはマズいのではないかと少しだけ怖くなったが、お肌はツルツルになるし、長年の肩こりまで取れていることに気が付いて病みつきになってしまった。

おっさんに感謝を伝えると、まるで新婚さんのようにうれしそうに頬を緩めた。そんな顔をされると、俺も少しうれしくなる。

次第に、俺はこの生活も案外悪くないかもなぁと思い始めていた。

おっさんは幽霊パワーでとても役に立つし、なんといっても笑顔がかわいい。こんなことを考えてしまう俺はおっさんに取り憑かれているのだろうか？

目の前のおっさんを見る。

おっさんは生姜焼きをモリモリ食べている。幽霊パワーで切って焼いた豚肉だ。半透明の体のどこに生姜焼きが消えているのかはわからないけれど、とにかくしあわせそうに食べている。

俺も生姜焼きを口に運ぶ。肉がとろけて、心の中で「なんじゃあこりゃあ」と松田優作が叫ぶ。

「おっさんの料理、うますぎるよ。この味に慣れちゃったら困るなぁ」

「なんですか？」

「お嫁さんの料理に満足できなくなっちゃうからね。俺は結婚したいんだ」

「なんと」と、おっさんは驚いた。「奇遇ですね。私もそうだったんですよ」

「そうなの？」

「ええ。決死の覚悟でこの家を買ったんです。これからお嫁さんを迎えるために」

「へ〜」

おっさんは俺と同じだったのだ。

「ですが、引っ越してきた当日に、ルンルンと階段を降りていたらスベって転んで死んでしまいました」

「それで地縛霊に？」

「はい」

「……………」

俺は少し同情した。決死の覚悟だったとはいえ、ほんとうに死んでしまうとは。地縛霊になっても仕方のない未練だ。

「しょうがない。おっさん、この家にいてもいいよ」

「いいギャグですね」

「は？　なんで？」

「だってほら、生姜焼きを食べてるから」

「真面目な話をしてるんだけど」

「すみません」

おっさんは少ししょんぼりとした。

「でも言ったとおり、私はそもそも外に出られないんですよ」

「それはわかってるよ。まあ俺の決意表明っていうか、そんな感じ」

「では、私を家族だと？」

「いや、そこまでは言ってないけど」

「いやあ、ありがとうございます。うれしいですね」

おっさんは少し涙を浮かべた。

「家族を持つのが夢だったんです。私はずっとひとりでしたから」

「や、だから家族とまでは言ってないよ？」

「またまたあ」

「まあ、将来はお嫁さんにも紹介するから、ちゃんとうまくやってよ」

「できるんですか？ 結婚」

「うるさいよ」

おっさんはフフ、とイタズラな笑みを浮かべた。

む〜、と俺は膨れる。やっぱり、案外いいコンビなのかもしれない。

「ですけど、お相手とうまくやってほしいなんて心配しなくても大丈夫ですよ」

「え？」

「この家から出る方法もあるんです」

「そうなの？」

「はい」

と、おっさんの体がまばゆく光りはじめた。

おっさんが発光している。

「……おっさん？」

「私の夢は叶いました。もう思い残すことはありません」

「突然どうした？」

「この家で家族と暮らす、その夢は叶いましたから」

「や、だから家族とまでは言ってないんだけど」

細目で見える光の中のおっさんがハニカんでいる。

「フフ、まさにこんな家庭を夢見ていたんです。冗談を言い合えるような、そんなしあわせな家庭を。もう思い残すことはありません」

「いや、あのほんとうに」

「ではよい家庭を築いてください。どうか、私の分まで」

「いや、だからおっさ——」

おっさんは一際まばゆく光を放ち、俺は思わず目を背ける。

目を開くと、おっさんの姿はどこにもなかった。

「……おっさん？」

おっさんを探して回る。

トイレ、お風呂、洗濯機の中。

でもおっさんはどこにもいなかった。

消えて、しまった。

「やれやれ」

俺はあらためて食卓について、おっさんが作った生姜焼きを口に運ぶ。
なぜか夢から覚めてしまったみたいに、ふつうの生姜焼きの味だった。おいしいけど、
それだけ。

ああ、もうおっさんの幽霊パワーは切れてしまったんだ。

そう思うと少しさみしくなった。

そして、気が付くと湯船で治ったはずの肩こりまで復活していた。

や、そこはそのままにしといてよ。

End